

「一つの石と二羽の鳥」

久野那美

長い長い道。

地平線を超えて。

この先はどこへ続いているのだろうか？

そしてどこから続いてきたのだろうか？

広い空の下。

時折小鳥が上空を通り過ぎていく。

目を遮るものが何もない中、ぽつんと小さな屋根がある。

ひざのすり切れたズボンをはいた女がひとり、立っている。

歌を歌っている。

車が一台、通りかかる。

男 すいません・・・

女 （歌うのをやめて）あ。いらっしやい。ガソリンですか？

車の窓が開く。顔を出したのは、疲れきった顔をした男・・・

男 あのここは？

女 見ての通り。給油所です。

男 なんでこんなところに？

女 こんなところに、給油所があつてよかつたでしょう。

男 まあ・・・

女、手を出す。

女 もう誰も通らないのかと思うこともあるし。
男 (来た方向と逆のほうを指さして) あっちからも？誰も来ない？
女 あっちからもそっちからも。
男 ……
女 でも、また誰か来るかもしれないと思うこともある。
男 ……あ、
女 お客さん、あっちの国のひと？
男 いや、
女 じゃあそっち？国へ帰るのね。
男 君は、どっちの国から？
女 わすれちゃった…。
男 え。
女 何ですか。
男 帰らないの？
女 (笑う) どっちに？
男 いや…。
女 ここにいたら何も聞こえてこないの。
男 何も？
女 どっちからも。何も。
男 だからここにいるの？
女 (無視する) 聞こえてこないのはお互いさまだけど。
男 君がここに居ることは、誰も知らないの？
女 (笑って) 誰も知らないかどうかは私にはわかりません。
男 いや…。これからずっとここにいますか？
女 先のこととはわからない。飽きたらほかへ行くかも。思い出したら帰るかも。
男 思い出したら、帰るの？
女 さあ。
男 思いたすといいね。
女 どうして？
男 帰るところがあれば、帰ることも帰らないこともできる。
女 帰ることと帰らないことしかできなくなるの？
男 そんな風に言わなくても
女 ふたつしかない選択肢から選ぶのは嫌なんです。
男 ……
男 ここから、あとどれくらい？

女 ここまで来たのと同じだけ。ここがちょうど真ん中だから。
男 そうなんだ……。じゃあ、全然足りなかったな。万全だと思ったのに……。

女、笑っている

女 道の長さがわからないのに、どうしてガソリンの量がわかるの？

男 入るだけ全部入れてきたんだよ。

女 それのどこが万全？

男 ……まあ、

女 (タイヤを見て) あらこつちも。けっこう来てますね、

男 ああ……。

女 替えは？

男 いや。

女 (ぼそつと) どうしてそんなに準備が悪いかな。

男 え！？

女 本気で帰ろうと思えば、実は帰れるのよ。

男 どういう意味？

女 覚悟というのは気合じゃなくて準備のことなのです。

男 なんの話？

女 旅の心得の話。

男 君は、

女 交換しますか？

男 何を？！

女 タイヤを。

男 そんなことできるの？

女 そんなことするための店なので。

男 ……

女 どうする？

男 (ポケットから紙幣を出して女に渡す)

女 いいの？

男 は？

女 ほんとに、いいのですか？

男 ……早くしてもらえますか？

女 急いでるの？

男 早く。

女 は〜い。

女はタイヤを出してきて交換を始める。

男は車から降りてくる……

女は歌いながら、てきぱきと作業をしている。

鳥がさえずっている。

しばらく。

男は歌をきいている。

女の顔を見ている……

女 なんですか？

男 いい歌だね。

女 そう？

男 さつきも歌ってたね。

女 そう？

男 歌が好きなの？

女 今は。

男 今は？前は？

女 前は、好きなのかどうかわからなかった。かも。

男 ？

女 歌うことしかできなかったから。

男 ？

女 わたしは歌うことしかできなかった。

男 ？

女 いつも歌ってた。何があっても歌ってた。何があっても歌おうと思ってた。歌うことだけしようと思ってた。

男 なんのために？

女 闘ってたのかな。

男 何と？

女 (無視する)

男 ……歌にはそういう力があるんだね。

女 何も変わらなかった。

男 え？

女 何も変わらない中一生けん命歌っていると、強い敵と妥協せずに闘ってるような気がした。

男

女 妥協せずに闘った。

男 勝ったの？

女 勝つためには勝つために必要なことをやらないと。

男

女 ほんとうに勝ちたいなら。

男

女 歌うことしかできない女が歌うってどういうことだかわかる？

男 え どんな状況でも、自分にしかできないことを探して精一杯、やる？

女 いつもと同じってことよ。

男 ?

女 何があっても自分には関係ないってことよ。

男

女 ここにいと、歌ってるだけじゃできなかったこともできるし、歌うこともできる。えつと、あの いつ

男 一石二鳥？

女 そういふ感じ。

男 (なにか考えている)

女 今は歌うのが好き。好きだから歌うんです。

男 歌ってるだけではできなかったことって？

女 帰ったらなにをするの？

男 え 決めてない。

女 いいですね。

男 なぜ？

女 なぜ . . . ? んー、なんとなく。

鳥の音がする。

男、空を見上げる。

男・・・一緒にいたのにどうして二羽ともやられたんだろう。
女ん？

男 一石二鳥って、一羽の鳥を狙って石を投げたのに二羽の鳥に命中して二羽とも打ち落として手に入れました・・・っていうことだよね。

女 そう・・・じゃない？

男 一緒にいたのにどうして二羽とも落とされたんだろう？

女 一緒にいたから・・・じゃないの？

男 違う。

女 (なぜそんなにきつぱり？) 何がおかしいの？一つの石でうまくすればふたつの鳥が手に入るって言うたどえ話でしょ？よくあることじゃないですか？

男 たとえられてるほうのことはよくあるかもしれないけど、たとえ話のほうは嘘っぽい。

女 どうして？

男 石はどういう順序で二羽の鳥に当たったんだろう？

女 そんなのいろいろあるんじゃない・・・の？すごく大きな石が二羽の鳥に同時に当たったのかもしれないし、まず最初に一羽に当たって、その次にもう一羽に当たったのかもしれないし、

石に当たった鳥がもう一羽に当たったのかもしれないし・・・(言いながら想像するけれど・・・なんとなくしっくりこない)

男 ね。なんかしっくりこないと思わない？

女・・・

男 一緒にいたなら一羽は逃げられたはずなんだ。

女？

男 生き物が一緒にいるのは生き延びるためだから。

女 ただ、一緒にいたかったのかもしれないじゃない。

男 心中ってこと？

女 そういうんじゃないかも。

男 それは美談なの？

女 ただ、単に。置いていけなかったのかもしれない。

男 だったら一緒に逃げるべきだった。一緒に落とされるんじゃないやなくて。

女 そんなこと言っても・・・

男 一緒に落とされるくらいならひとりで逃げるべきだった。そもそも、同じ方向を向いて同じ格好で轉ってるべきじゃなかった。あるいは。

女 あるいは？

男 別のほうを向いてる鳥と一緒に歌ってるべきだった。

女 べきべきって、おかしくない？あなたには関係ないじゃない。

男 そうだね。

女 どうしてことわざの中の鳥の話をするの？あなたがその鳥を飼ってたの？

男 僕はその鳥を飼ってない。し、僕自身がその鳥でもない。

女

男 話さなくていいと思うよ。ことわざの中の鳥のことなんて。

女

男 誰も。

女

男 その鳥がどうすればよかったのか。ことわざの外で誰が何を考えたってその鳥は助からない。

女

男 べきべきいったってその鳥は助からない。

女

男 二羽の鳥はそこで起きた事かしらないし、そこで起きた事を話すこともない。

女

男 話しても二羽の鳥は助からないし、話してもそこで起きた事はそこで起きなかったことにはならない。

女

男 僕たちは今、そこで起きなかったかもしれないことを話してる。

女

男 助かったかもしれない一羽の鳥のことを話してる。

女

男 考えなくていいのかもしれないけど . . .

女

男 誰も . . .

女

女 誰がみてたんでしよう？

男 何を？

女 二羽の鳥が打ち落ちられるところ。

男

女 そして、なぜ私たちはそのことを知ってるんでしよう？

女 そうか。

男 何？

女 石を投げた人は、考えない。

男 何を？

女 そこで起きなかったかもしれないことを。

男 ・ ・ ・ 撃たれた鳥も考えない。

女 それどころじゃないからね。

男 たまたまその場にいなかったほかの鳥も考えない。

女 何が起きたか知らないからね。

： じゃ誰も考えないの？

男 誰も考えないかどうかは ・ ・ ・ 、わからない。

女 誰かが考えたらどうなるの？

男 最悪の事態が避けられる ・ ・ ・ ・ ・ ・ かもしれない。

女 避けられる？一羽だけ逃げ延びるってこと？

男 ・ ・ ・

女 それだけ？

男 ひとつしかないと思つてた答が二つに分かれるなら、その先には無数の違った答があるかもしれない。

女 ことわざの中に？

男 それじゃことわざにならないから、ことわざの中にはないな。

女 じゃ、ことわざの外に？

男 ことわざの外に。ことわざの後に？ことわざの先に？

鳥の声

それ以外は、なにも聞こえない。

しばらく。

女 おわったけど。

男 え。

女 完了。

男 あ ・ ・ ・ 。

女 古いのは処分していいですか？

男 うん。ありがとう。

女 どこまでも行けるわけじゃないけど、ここままでと同じだけは行けるはず。

男 うん ・ ・ ・ ・ ・ ・ おかげさまで。

女 道に迷つたり事故が起きたりしなければね。

男 ああ ・ ・ ・

女 その時は別の給油所を探すのよ。

男 こんな所がほかにもあるの？・・・この先に給油所があるなんて聞いてないよ。

女 誰に？

男 誰にも。

女 へえ。(それがなんの判断材料になるんだ？)

男 あのさ、

女 何？

男 乗っていかない？

女 は？

男 あっちの国へ向かう車だけど。

女 つまり私はあっちの国へ行くの？

男 そういうことになるけど、いや？

女 なぜ？なんのために？

男 行つてから考えればいいじゃない。

女 ……？

男 行つてみたら、実は帰ってきたのかもしれないし。

女 なにそれ？

男 いや？

女 なにか考えている

女 給油所によるたびに店員を乗せてたんじゃ車が何台あっても足りないんじゃないかと・・・。

男 いやまさか。

女 みんな乗るつていつたらどうするの？

男 えっと

女 みんな乗せるの？

男 まさか・・・

女 それに、ここはどうするの？

男 いや・・・

女 私は別にここであなたを待ってたわけじゃないんですけど。

男 あー

女 誰かがまたすぐガソリンを入れにくるかもしれないんですけど。

女はさっさと後片付けを始めている

男 もう歌わないの？

女 なぜ？

男 なんとなく。

女 歌いますよ。ご心配なく。

男 あ・・・

女 あなたが今日ここでガソリンを入れたことはあなたにとっては特別な出来事だったかもしれないけど、私にとってはすごくふつうのことなんです。

男 あ・・・

女 ここはそういう店なので。

男 ・・・はい

女 早くいけば。

男 え？

女 急いでるんでしょ？

男 いや・・・

女は店の中に入ってしまふ。

男は仕方なく、エンジンをふかす。

大きな音がする。

道の傍に小さな小さな墓がある。

土を盛って割り箸を突き刺したような。

誰も気づかないかもしれないけれど、小さな墓がある。

ひとつではなく。ふたつでもなく。あたり一面に、数え切れないたくさんの墓がある。

誰も気づかないかもしれないし、気づいても気にしないかもしれない。そもそもそれを墓だと思わないかもしれない。

だからそれは墓ではなくもつと別の何かかもしれない。

積み上げられたたくさんの、靴。あるいは使い古したタイヤの山・・・

そう思ってあたりを見れば、積みあがった山をかき分けるように一本の道が通っている。

今、できたばかりの、一本の道が、遠くまで続いている

その道のことを知っているのは誰だろう。

歌が、聞こえてくる・・・

誰かが、また、その歌を聞くだろうか。